

「人に寄り添う人を育てたい」 筑女大が能登支援



宗門校の筑紫女学園大学（福岡県太宰府市）は、「人に寄り添う人を育てたい」という願いのもと、東日本大震災に続いて、大学として能登半島地震の被災地支援に取り組もうと、学内から学生ボランティアを募集。14人の学生が8月26日から28日まで、石川県の能登町、七尾市能登島の仮設住宅や集会所を訪れ、炊き出しなどを通じて被災者と交流した。

能登半島地震の被災地でボランティア活動はこれまで、同大学現代社会学部の栗山俊之教授（福岡市博多区・覚本寺住職）のゼミ生を中心に2回実施。この活動の報告会で、参加した学生が多くの学びを語ったことから、同大学は、学内挙げての被災地支援活動に広げることに決めた。

全学生が所有する共有アプリでボランティア参加を呼びかけ、応募者25人から抽選で8人を選出。同ゼミ生6人とともに支援活動に携わった。学生14人は引率の栗山教授、事務職員3人とともに、26日に福岡から

空路で石川入り。金沢別院内（金沢市）に設置する宗派の能登半島地震支援センターに宿泊して活動した。同センターのスタッフの案内で被災地を見学。輪島市、能登町などを訪ね、倒壊したままのビルや家屋や、段差や亀裂が入る道路などを目の当たりにした。初めて被災地を訪れた学生らは震災発生から8カ月経ってもなお、復旧・復興が思うように進まない被災地の現状に心を痛めた。

27、28日には2カ所で炊き出し。27日は能登町役場内浦総合支所の調理場などで調理。九州の名産を使った明太冷やし茶漬け、梅じきわにぎり、だご汁など200食分の食事を同町松波地区の仮設住宅で暮らす被災者に振る舞った（写真上）。28日には、3回目の訪問となる七尾市能登島のえの目多目的集会所で「居酒屋筑女」をオープン。より多くの人に参加してもらえるように、そして、お酒を飲みながら本音で語り合ってもらいたい」と「居酒屋」と銘打って、焼き鳥や餃子、焼き明太子などを一緒に初めてアルコールも提供した。参加者の中には若い世代の姿も見られ、住民と学生は語り合い、交流を深めた（写真下）。

公募で参加した現代社会学部3年の山新田歩美さんは「初めて訪れ、倒れたままの家屋などを見た。被災者の方から『もう8カ月も経ったので復興が進んでいると思われているかもしれ

「感謝の言葉いただき胸が熱くなった」



ないが、実際はこうしたつらい現実が続いている」と聞き、胸が痛んだ。こうした思いを家族や学友など周りの人たちに伝え、先が見えない被災者の方たちの不安に寄り添いたい」と話した。

3月に続いて2回目の参加という同ゼミの池田愛唯さん（4年）は「えの目の集会所で被災者の方たちと5カ月ぶりに再会した。前回は挨拶程度で終わってしまったが、今回はじっくりと話を聞くことができた。仮設住宅で一人暮らしする60代の女性は、隣近所の目が気になり、窓もカーテンも開けられないと、大変な状況を語られた。それにもかかわらず、私たちをねぎらいつつ、訪問に感謝の言葉を口にされる姿に胸が熱くなった。苦労されている被災者の方々のことを忘れることなく、これからも支援を続けていきたい」と語った。

同大学はこれまで、東日本大震災、熊本地震や九州北部豪雨の被災地支援などを継続的に行っている。その発端となったのは東日本大震災の支援活動。震災翌年の2011年にスタートし、これまで28回、延べ約300人の学生が被災地を訪ね、炊き出しや被災者との交流を行ってきた。現在も毎年1回、訪問を続けている。

当初から支援活動に携わり、今回の能登半島地震の被災地支援でも、ゼミ生たちとともに中心的な役割を担っている栗山教授は「人のつながりが生まれることで、相手に元気を与えるだけでなく、私たちも元気をいたくることができ、今回の活動で、それが活動の継続をもたらし、いつと何を再確認できた。いつ、どこで、どのような規模の災害が起きてもおかしくない地理的条件のもとで暮らしている私たちが、『支える・支えられる』という関係が、今にもまして当たり前になっていくようにと願っている」と語り、継続的な活動を誓った。